蒼い空の下で

blaze

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
蒼い空の下で

【Ｎコード】
Ｎ８４４０Ａ

【作者名】
ｂｌａｚｅ

【あらすじ】
これは遥か昔からの物語。人間でありながら属性の力を持つ者達、『属性者』。その中でも人々に忌み嫌われきた『空』の属性者の物語。

プロローグ

はるか昔から語り継がれてきた神々の物語
古代、人間が生きるために『神(しん)』から与えられた力…水、焔、雷、
風、氷、金、木
月、太陽、海、大地、光と闇…そして…空
それらの力を持つ者は『属性者』と呼ばれていた
人々に幸福や平和を
時には混沌や恐怖を与えてきた
ある者は平和のために戦い
ある者は私欲のために戦い
ある者は自分の大切なものを失い…その復讐のために戦った
この物語は悲しみに満ちた歴史を継ぐ『空』の属性者の物語
人々のために戦いながらも、『蒼天の悪魔』と呼ばれ、忌み嫌われ

てきた悲しい「空」の物語

そんな悲しみで縛られた物語が変わろうとしていた

誰もが変えることはできないと思い込んでいた

空を見上げつぶやく少年…『空』の属性者、蒼崎空

「……ダメだ…全然覚えてない」

少年の親友、『月』の属性者…天月直哉

「蒼崎の所に?…了解しました…『神』」

同じく親友の『太陽』の属性者…緋山太陽

「…了解です、『神』。それが蒼崎ためになるのなら」

そして幼馴染の少女、清水雪美

「空…早く来てくれないないかな…」

それぞれの想いが交差し、物語がは始まる。
その結末は今までのように筋書き通りなのか…
それとも、新しい物語が紡がれていくのか…

今、新たなる『空』の物語が始まる

第０１話：再会

ざしゅ

肉を切り裂く感触。
噴出す血飛沫で顔に返り血がついた。
不快感は、無い。
なぜならこれが『属性者』の仕事だから。

「グ…ゴォ……ア……ァ…」

属性の力を持ち、その武具を持つ者を属性者と呼んだ。
異形の存在を無に帰す、ヒトの為に存在する者達。

「……しつこいな」

ソレを無機質な目で見下していた。
『闘鬼―オニ―』と呼ばれる存在。
どこからともなく現れ、人を食う。

遥か昔から人の世に蔓延り、残虐の限りを尽くしてきた。
その原初はヒトの悲しみ、恨み、妬み、憎悪といった負の感情。

ざしゅ

その顔に剣を突き立てた。
オニと言っても、角があって、トラ柄のパンツを履いているような
そんなオニじゃない。
闘鬼の姿は獣そのもの。

四つんばいで移動し、唯一合致していることは2本の角。

「じゃあな」

それを斬り落とせば、闘鬼は消えて無くなる。
人語は解さない。
本当に、獣としか言い様が無かった。

「誰の恨みや憎しみかはわからないけど……消えてくれ」

ザンッ

空のような蒼い剣が。
その憎しみの結晶へと振り下ろされた。
長い前髪から見え隠れする眼光は、どこか寂しそうで、切なそうで。
その耳にはとある属性者の証である耳飾が揺れていた。

年月が過ぎさるのは、驚くほど早い。
だが、そんな過ぎてく景色の中でも変わらないものだってある。
駅のホームに降りずいぶんと久しぶりに帰ってきたこの町の景色を見た。
おぼろげな記憶の中の映像とあまり変わりは、無い。

「…はぁ」

ため息をつく。
前髪が邪魔で見えにくい視界でもそれを確認できた。
８年ぶりにこの街、折原市に帰ってきた。
８年も前ならおぼろげになっていても仕方が無い。

とんっ

「あ、すんません……って」
「すみませ…ん……？」
隣にいて、ぶつかってしまった人の顔を見て思考がしばらく止まった。
前髪はそれほど長くないが首元よりも長い髪。
何より、その前髪で隠れそうで隠れていない冷たく、鋭い眼。

「天月……か…？」
「お前…蒼崎か」

しばらくぶりで友達に会ったというのに無愛想なヤツだ。
その名前は天月直哉。
中学校時代からの腐れ縁で、一緒にいた数少ない仲間だった
性格はクールで、多少皮肉混じりのことを言う。

「まさか、同じ電車に乗ってるとはな」
「まったくだ。で、何の用にここに？」
「それは……」

「おーいっ！！」

呼ぶ声がして前を見た。
髪は短めで、ツンツンしていてハリネズミのようだった。
バカみたいなでかい声で、手まで振っている。
同じく、中学校時代からの腐れ縁。
緋山太陽だった。

「やっと着いたか。ったく、乗り遅れたかと思ったぞ」
「…すまんな。それより、気づけ」

「ん？」
普通に隣にいるのに、まったく声をかけてこない緋山。
わざとやってるのか素でやってるのか…

「よう。久しぶりだな、緋山」
「蒼…崎…？蒼崎かっ！！久しぶりだなオイ！」

背中をバシバシ叩きながら挨拶をしてきた。
豪快といえば聞えはいいが、何かと喧しい。
だが、こいつ等とはかれこれ、１年ぶりの再会になる。

「緋山もなんでここに？」
「言って無かったっけ？俺はこの辺に一人暮らししてんだよ」
「俺は…まぁ、後で話す。長くなりそうだからな」
「なるほどねぇ…とにかく、改札抜けよう」

こんなところにいたって仕方が無い。
積もる話もあるだろうからさっさと行きたかった
久しぶりに会えば、積もる話もあるだろう。
ここは地元民の緋山にどこかいい場所がないか聞いてみることにした。

「とりあえず、どっかの店に入らない？」
「そうだな。ちょっと小腹が空いた」

珍しく、天月が乗った。
普段は無口なので黙ってついてくるだけだと思っていた。

「緋山、いい場所無いか？」

「うし、そこにしよう」
別に異存も無いのでどこでもよかった。
近くのファーストフード店、「ＢＯＳＳバーガー」に入った。

「それで、なんで天月がここにいる。旅行…ってわけじゃなさそうだな」
「ああ。ここに引っ越してきた」
「…へ？」
「おっと…それと通う学校も同じだから。そうそう、緋山が行ってる学校だと」
「なんだ、ウチの高校かよ」
天月はこの上ないくらい元気良く言ってきた。
緋山も妙に納得していた。

「……このボケにはどうツッコめばいい？」
どう考えても天月が冗談を言っているとしか思えなかった。

「だから、俺はここに引っ越してきたんだよ」
「前の学校でなんかやらかしたのか？」
「蒼崎じゃあるまいし」
「やかましい！！」
「……まぁ、家庭の事情ってやつだな」
「ふむ…そっか」

話が止まった。
なんだか複雑そうなので聞き出すのをためらわれた。
天月自身が話してくれるまで待っている方が得策だろう。

「それにしてもまたこの3人が揃うとはな…」
「まったくだ」
「これからの生活が心配だよ、オレは」

前の高校でも、中学校でも。
お世辞にもいい生徒とは呼べなかった。
品行方正、などとは幾光年もかけ離れていたから。

「……天月、あの街は、何か変わったか？」
「…変わってない。そう簡単に変わるか」
「そっか…」

その一言で会話が止まった。
あまり触れない方がよかった、と言ってから思った。
自分自身、なぜあの街の話を切り出したのかわからないくらいだった。

～～～～～～～♪♪

携帯電話の着信音が鳴った。
ご丁寧に3人同時に。

「…あ！！」

「……ま、まずい」
「やべ」

全員、同じような顔をしていた。
結局、やることはいつも同じだった。
次の瞬間すぐ片付け、店を出た。

「何でお前らも走ってんだよ！」

隣を走りながら緋山が怒鳴ってきた。
つばが飛びまくっていることに気づいていないようだった。

「ああ！？喧しい！！それどころじゃないんだよっ！！」

その隣で天月はなにやら呟いていた。

「殺される…殺される…殺される…」

だいたい予想はつく。
これまた、ご丁寧に3人同時に待ち合わせに遅刻してるようだった。
必死の形相で走り抜けた。
十字路に差し掛かった。

「俺、こっち！またな！！」

緋山は右に。

「生きてたらな…」

天月は左に。

「…なんだかなぁー」

オレは真っ直ぐ駆け抜けた。

駅前のベンチに座っている少女がいた。
身長は１５５ｃｍくらいだろう。
髪は背中まであるロング。
一瞬、誰かわからなかった。
記憶の中の映像と合致しなかったから。
だけど、どこか面影が残っていた。

「…ま、待たせたな…」

ようやく思い出せた。
８年前、この街を去る前までいつも一緒にいた幼馴染…清水雪美。
その姿は８年前とは全然違った。
当然と言えば当然なのだが。

「空…遅いよ…」

「わ、わりッス…（やべぇ…拳握ってる…）」

「３０分以上待ったんだよ？」

頭の中は必死に言い訳を考えていた。

「あまりに久々だったもので…道に迷ってしまいまして…」

「…ホントに？」

「ホントっす！」

「…ウソだ」

「っ！！…なんでわかったんだ…」

「だって、空がウソつくときって必ず『～ッス』って言うんだもん。昔っからそうだよ」

「（そ…そうだったのか）なんか奢りますから許してください」

「その前にさ…その動いてるの、何？」

持っている大き目のバッグを指差して奇異の目を向けて聞いてきた。駅構内からずっとそれを忘れていた。

「出すの忘れてた…それっ」

バッグを開けソイツを外に出してやった。

名前はアルマ、大きさは１５ｃｍくらい。

尻尾があり、背中には小さな翼らしきものがあった。

「クゥー！！」

どうやら怒ってるらしい。

ぺしぺしと叩いてきた。

「悪りぃ悪りぃ。窒息寸前だったな」
「クー！クゥー！！」
「…ねこ？」

異様なモノを見るように（実際、異様だが）雪美はアルマを見ていた。
とはいうものの、上手く説明できないのも事実だった。

「…いぬ？」
「疑問系で返さないでよー」

少し、飽きれたような顔で文句を言う雪美。
もし、自分が同じことをされたら有無言わさず殴っているかもしれない。

「…ぐ…」

ペットと言えば、ペットである。
数年前から常に周りを飛び回っている。

「…でもかわいいね。おいで！」
「クゥー！」

アルマは嬉しそうに雪美の方へ飛んでいった。

（クソッ…オレにはいっつもケンカ売ってきやがるくせに…）

クウの勝ち誇った憎たらしい顔を見て殺意を送っていた。
普通の人から見ればわからないらしいが、オレには十分すぎるほどわかる。

「…うらやましいの？」
「んなわけあるかい！！」
「ふふっ」
「何がおかしい？」
「照れてる空の顔かわいいなーって」
「照れてないッス！！」

自分の顔が熱くなった気がするのですぐ歩き出した。

「さっさと行くぞ！」
「わ、待って」

8年前に住んでいた街での暮らしが始まった。

「相変わらず遅いな…」
「そんなこと言ったって…でも、昔のこと、ちゃんと覚えてるみたいだね」

幼馴染の何気ない一言もなぜか不思議な感じがした。
ここにいたころの記憶。
そのどれもが霞んでしまっているような気がした。

「そう言ってもちゃんと待ってくれるんだね、空は。それも昔と同じだよ」

その笑顔に8年前の面影を見つけた。
それを見て、心なしかほっとした気がした。

「……気のせいだ」

それでも、どこか寂しさ…とも言い難い思いが胸の中に残っている気がしていた。
曖昧すぎて自分でも理解できないほどの微弱な心の動き。
それが何に由来しているのか、気づくことの無いまま歩き出した。

「…でも、空ってウチの場所わかるの？」
「……」

黙って雪美の後をついていくことにした。

「ここだよー」

駅前から歩くこと１０分ほど。

交通の便には困ることはなさそうだった。
それ以前に、この街を出ることはしばらく無さそうだが。

「…そりゃ、そうだよなぁ」

家は８年前のまま。
この街を去る少し前に立てた家なので新しい方に入る。
思ってたより広かった。

門をくぐって、少し戸惑った。
表札の位置が、低かった。
当然といえば当然だが、自分だけが変わってしまった感覚にとらわれる。
全てから取り残されたような、言い知れないむなしさを感じた。

「お邪魔します…」
「だめー」
「へ？」

玄関から家に入ろうとして止められた。
掃除でも終わってないのか、足下に画鋲でも置いてあるのか。

「…早速、支配の構図を作るつもりか」
「何言ってるの、空？やり直し、だよ」

よくわからないまま、後ろに数歩下がった。
なぜか姿勢を正してしまう。
さっきのような笑顔で雪美は言った。

「おかえりなさい、空」

「え…あ……？」

突然のことでびっくりした。
それと引き換え、雪美は本当に嬉しそうに笑っていた。
その笑顔を見て、その言葉を聞いて。
言いたいことがわかった。

「…ただいま、雪美」

そんなことをしているうちに家の奥から誰かがやってきた。

「あら、もう着いてたんですか？」
「あ、はい。少し遅れてすみません、千秋さん」

この人は清水千秋。
雪美の母親であり、この街での保護者にあたる人である。
どうも8年前からまったく変わっていないような…それにしても綺麗な人だと思う。

「お世話になります」
「いえいえ。ようこそいらっしゃいました」
「クゥ！」

そう、千秋さんは笑顔で言った。
その笑顔が雪美に似ていた。
というより、成長して雪美が千秋さんに似てきているのだろう。

「あ、荷物届いたみたいだよ」

横を見てみると黒い猫のシルエットが書かれたトラックが止まっていた。
予想以上に早く着いてびっくりした。

「やってくれるぜ、ホーリーナイト」
「空、独り言？」
「あ、いや…それじゃ、運びます」

これ以上、つっこまれると答えにくくなるので急いで荷物を運んだ。
あてがわれた部屋は二階の一室。
外見より、妙に広い。

「ここか…って隣は雪美か」

ドアに「ゆきみのへや」と書いたプレートがぶら下がっていた。
部屋ぐらい漢字で書いてほしいものだと思った。

片づけを終え、リビングのソファの上に座った。
正直、疲れた。
荷物は決して多くないのだが、階段の上り下りが効いたようだ。

「あぅ…体が…」
「そろそろご飯にしますよ」
「あ、手伝いますよ」
「それが…」

「いいからっ、空は座っててー！」

台所の方から雪美の声が聞えていた。
手伝いが迷惑なのだろうか。

「…すんまへん」
「空さんが来たからってあの子、張り切っちゃって」
「お母さん！言わないでって言ったのにー…」

再び、台所から雪美の声が聞こえた。
毒を盛られていないことを祈ろう。

「このコはどうすればいいかしら？」
「クゥ？」

何も動じず、アルマに話しかけていた。
というより、妙に千秋さんに懐いていた。

「そいつ雑食なんで同じで大丈夫です。ってか、残飯処理でもやらせ…ぐふっ！」
「クウー！！」
いい具合にアルマの蹴りが鼻に入った。
結構どころかとんでもなく痛かった。
「き、貴様…」
「クウゥ…」
鼻血がどくどくと流れてきた。
本格的に殴り合う前に、千秋さんの鶴の一声で状況は収まった。
「ケンカはダメですよ。そろそろできたみたいですよ」
結構な量の料理がテーブルに並んだ。
和洋折衷、様々な料理が並んでいた。
「……」
「ちょっと作りすぎちゃったかな…？」
「てへっ☆」とでも言うかのように雪美は言った。
だが、出された料理を食べきれないなんて男が廃る。
「…食べつくしてやる」
「クゥッ」

「げふっ」

部屋のベッドの上で寝そべって天井を眺めた。
少し食べ過ぎたようだ。
風呂も入り、アルマを寝かせてのんびりしていた。

「ただいま、か…」

言い慣れていない言葉だった。
だけど、「ただいま」と言って「おかえり」と返ってくることにどこか安心している自分がいた。

「いつまでも…いられるわけじゃないからな」

新しい生活が始まる。
親友との再会。
幼馴染との再会。
居心地の悪さは、無い。

もしろ、最高と言っていいだろう。
それでも…ひっかかりが心に残る。
ぽっかりと空いた大穴は、そう簡単に埋まらない。
埋まることはあるんだろうか。
今、できることは。
成すべきことは。
自分の役目は…

そんなことを考えながら、眠りにおちていった。

第０２話：始業

目を覚ますとものすごい違和感を感じた。
見覚えの無い天井。
見覚えの無い部屋。

「…そうだった」

ちょっとしてから、清水家での居候生活が始まったことに気づいた。
体を起こし、机の上の小さい布団で寝ているアルマを起こす。
さすがに転校初日から遅刻はまずい。
そう、平穏に行きようと心に決めたのだ。

道案内は雪美に頼もう。

「さっさと起きやが…れっ」

ボスッ

アルマをベッドに叩きつけた。
見事に頭から突っ込んだ。

「ク…クゥ…」
「よし！下に行くか」

アルマはふらふら飛びながら後ろをついてきた。
後ろから非難の声（？）が聞えてきたが、聞えないふりをした。

「あ、おはようございます、千秋さん」
「おはようございます、空さん。朝食にしますか？」
「あ、はい。お願いします」
「ちょっと待っててくださいね」

ここに居候できたのは、母が千秋さんと親友だったからだ。
そうでなければ、ここにいられない。
いくら幼馴染といえども、そこまで世話になるわけにいかない。

ニュースを見ながら朝食がくるのを待っていた。
何も手伝わないでいるというのも悪い気がする。

「空さん、ちょっといいですか？」
「はい？何でしょう？」
「雪美を起こしてきてほしいんですけど…いいですか？」
「お安い御用です」
「それではお願いしますね」

階段を上って雪美の部屋の前に立つ。
いくら幼馴染とはいえ同い年の女子の部屋に入るのは抵抗がある。

ドアノブを回す瞬間にとても重要なことを思い出した

「すー…すー…」

布団に包まって、すやすやと寝息をたててていた。
形容できないほど、気持ちよさそうに眠っていた。
起こす方に罪悪感が込み上げてくるほどに。

「朝だぞー」
「うぅん……すー…」
「雪美って寝起き悪かったんだっけ…」

自分自身、寝起きはかなり悪い方だと自覚している。
一度、日曜の朝に起こしに来た緋山と殴り合ったこともあった。

だが、雪美のそれは常人を遙に凌駕していた。
ってか、これ起こせるのか？

「起きろ！遅刻するぞー！！」

ゆさゆさ…

肩を掴んで叫んでみるが…

「んみゅ……くー…」
「…最終奥義を使うか」
雪美の下の方に回りこみ、布団の裾を掴んだ。
「…後悔するなよ？」
そして、掴んだ布団を。
力の限り、引っぺがした。

朝の雪美との激闘があったせいか朝食がとてもおいしかった。
「ぶー」
「初日から遅刻させる気か。オレが不良と呼ばれてもいいというのか？」
「空が不良って呼ばれても、わたしは困らないもん」
「オレが悪いってか！？」
あからさまに顔をそらして不満を表現していた。

起こしてやったと言うのに理不尽な…
そんな雪美を千秋さんが静かに諭した。

「雪美がちゃんと起きれないからでしょ？」
「だって、空が起こしにくるなんて思わなかったんだもん…びっくりして飛び起きちゃったよ」
「あら、それじゃあ毎朝空さんに頼もうかしら」
「おかーさん！！」

なんとも平和な朝の一コマ。
きっとこれからオレの朝だけは修羅場と化すに違いない。

「…とにかく、まだ出なくて大丈夫なのか？」
「えーっと……えへっ」
「……へ？」

そうして、家を飛び出した。
雪美曰く、走れば情状酌量の余地があるらしい。
ようするに、遅刻だった。

「「いってきますっ！！」」

「はい、いってらっしゃい」

千秋さんに見送られて出発した。
オレが来るまでは一体、どうしてたんだろう…

そんなことを考えてる暇はないくらい、全速力で走り続けた。
初日に遅刻なんて、ケンカを売ってるとしか思えない所業。
なんとしてもそれは避けたかった。

「あれ、雪美じゃない」

どこからともなく聞こえたその声で足を止めた。
雪美よりも若干背の高い女子がそこにいた。
話し方からして、雪美とは仲が良いようだった。

「み、美鈴？急がないと遅刻しちゃうよー？」

「あなた、また時計狂ってるのね…歩いても間に合うわよ」
「あ、ホントだ」

それを聞いて一気に脱力した。
またってことは今までにも何度かあったようだ。

「ぜぇ…ぜぇ…うぐっ……おま、…またって…どーゆー……」
「うー、ごめん…」

息も絶え絶えで雪美に問い掛けた。
あれだけ走ったのに、普通に話していた。
そんなオレを哀れみの目を向けてきたその人が呆れた様子で言った。

「…で？雪美の朝マラソンの被害者の彼はどちら様？」
「ほら、この間話した、空だよ」
「あら、これが例の蒼崎君？」

こらこら。
どの蒼崎だ、オレは。
一体、どんな説明をしたんだか…

その人は何か見定めるようにジロジロ見てきた。

「…ふーん。あたしは藤原美鈴。雪美の友達よ、よろしくね」
「お…う……こちら……こそ……よろしく……」

いまだに息が整っていない。
これだけ走ったのはどれだけ久しぶりなんだろうか…

「あれ？この前、美鈴が言ってたあの人は？」

「ああ、面倒だから置いてきたわ」
その雰囲気以上に冷たいお方のようだった。
とりあえず、逆らわないでおこう（涙）
「あら、どうやら追い着いたみたいね」
そう言って見た遠くにいる男子生徒。
制服は同じなのでもしかしたら、二人の友達なのかもしれない。
「はぁ…はぁ…はぁ…道っ……わからっ…ない……」
「だいたい、アンタがお父さんに捕まったのが悪いのよ。遅刻するなら一人でしてちょうだい」
これは冷たいを通り越して、絶対零度だと思った。
自分と同じように肩で息をしているその男を見た。
どこかで見覚えのある男だった。
「「あれ？」」
お互い顔を見上げた時に気づいた。
声を聞いたときにもしやと思ったが…
それより、呼吸を整えるのが大変で顔すら上げられなかった。

「あ、まつ…き……」
「あお……さき？」

そうしているうちに学校に着いた。
美鈴と雪美は着くと同時にクラス替えの紙を見に行った。
どんな偶然なのか。
なんと天月は雪美の親友の家に居候しているようだった。
「しかも、クラスも同じ…これで緋山もいたら騒がしくなりそうだな…」
「主に騒いでるのは、蒼崎と緋山だけだがな」
ここまできたら、緋山も同じクラスだったとしてもなんら不思議は無い。
だが、緋山がここにいるということはもう一人余計なのが…
「あーっ！！アンタはっ！！」
そう思ったとたんに耳を劈くかのような大声。
聞き覚えがあった。
願わくば二度と聞きたくなかった声だった。
その声の主にも会いたくなんてなかったから。
「よう、ひさしぶりだな。蒼崎、天月」
「なんでここにいるのよ！？特に蒼崎っ」

仲良く二人で来たのは緋山だった。
その隣にいるのが生涯の天敵である青山海。
思い起こせば中学から一緒だった気がする。

「……オレ、頭痛いから保健室行きてぇ。ああ、青山の幻が見える。眼科にも行こう。それとも、カウンセリングでも受けるべきか」

「初日から保健室登校なんていい身分だな、蒼崎さんよ」

「そうよ。アンタはさっさと職員室でも行って自己紹介の内容考えてなさいよっ」

この夫婦漫才どもが…
卒業間際から付き合っているこの二人のコンビネーションは強い。

「……戦闘空域を離脱します」

「緋山も青山も、相変わらずだな。少しは加減してやれ」

「まぁ、同じクラスにはなれなかったがよろしくな、蒼崎」

天月が緋山の肩をポンと叩き、緋山が心底愉快そうに笑っていた。
この恨み晴らさずおくべきか……

その後、おとなしく職員室に向かった。
担任は吉岡というらしい。

特に怖そうな感じは無く、人柄も柔らかそうな感じだった。
「なぁ、天月よ…お前は緊張しないのか？」
廊下で声をひそめて天月に聞いてみた。
見た目はまったく緊張なんてしていなさそうだった。
「別に。気張ったってしかたないだろう？」
「お前はコレが無いから呑気にできんだよ…」
そう言ってアルマを指した。
担任と校長にはすでに説明しておいた。
自分の持つ力、それを行使すべき場所。
ただ、普通の生徒には奇異の目で見られることは間違いなかった。
そうこうしているうちに教室に着いた。
妙に騒がしい教室の扉の前で待った。
「……ここだ」
「独り言か、蒼崎」
「この瞬間が結構なプレッシャーになるんだよ」
担任が入ったことで教室は静かになった。
すると、静かになったと思った次の瞬間には落胆の声が響いた。
その声は明らかに男子の声だった。
「状況を説明するなら、転校生が男で落胆する男子のため息だろうな」
「……なるほど…これは予想以上に入りにくくなったもんだ」

今更になって緊張感が漂ってきた。
隣の天月も少し緊張しているようだった。

「じゃ、入ってきてー」

担任の呑気な声が聞こえてきた。
人事だと思いやがって…と思う自分は酷く自己中心的だと思った。

教室に入るとその反応は一目瞭然だった。
廊下側の方々は興味が無いのか、早くも教科書を予習している。
真ん中辺りの方々は品定めをするかのように見ている。
後ろの方から「レスリング部にピッタリだ」とか、「いやあれは相撲部ですたい」とか聞こえてきた。

（おい！俺は相撲はやんないぞ！）
（落ち着け、天月！目を合わしたら負けだぞ！）

窓側の方々はもんのすごい目でこちらを睨んでいる。
あからさまに態度が悪そうなそいつらは素行もよくないのだろう。
だからこそ、新しい存在を早くも威嚇しているのだと思った。
特にこの耳飾があれば余計そう思われてしまう。

「じゃあ、2人とも、窓際の方に席開いてるから、そこに座ってくれ」

目眩がした。
きっと、わざとではないのだろう。
だけど、これじゃあ火に油を3リットルほどぶっかけるようなものだろう。

今後の生活を思うと軽く泣けてくる。

「……わかりやした（涙）」

そうして座ると、隣には思いも寄らない人がいた。

「隣だね、空♪」

「……なんで清水のお前がここに」

「ついでに言えば藤原のお前がなんで清水の後ろに」

「担任に隣に来いって言われたのよ…あんたらがいろいろわかんないだろうからって」

それは嬉しい限りだった。

ガラの悪い集団と一緒の新学期なんて殺伐とした空気に息がつまってしまう。

「出席をとるぞー」

周りからの視線とひそひそ声がやたら気になったが、転校1日目くらいおとなしくしておくことにした。

こちらを品定めするような、そんな視線にも気づかずに。

お昼休み。
どうにもこうにもご飯を食べないことには始まらない。
おとなしく、雪美と美鈴についていくことにしよう。

「なぁ、昼めｓ……」

言い終わる前にその異常さに気づいた。
周りには人だかりができていた。
ご丁寧にオレと天月を中心として。

「……え。な、どうしたの？」
まさか、洗礼とか言ってぼこぼこにされるのだろうか。
そ、そんなまさかっ。

「よろしくな、転校生２人」
「ところでさ、２人って何かスポーツとかやってたりする？」
「前の学校で部活とかは？」
「てかさ、バスケやんない？」
「おい、抜け駆けすんなっ。テニス部に貰うんだから」
「ねぇねぇ、このちっちゃい子借りてっていい？」
「てゆーか、これなんなの？まぁ、可愛いからいいか♪」

主に部活の勧誘だった。
そして、アルマは拉致。
正直、雪美や美鈴の姿はまったく見えない。

「えーっと…スポーツは特に。前の学校でもやってなかった」
「……俺もだ」

「じゃあ、野球やらないか？ウチの高校、結構強いんだぜ」
「はっ、地区予選準決勝がいいとこだろうが。ウチの高校って言ったらサッカー部だぞ。一緒に国立目指すぞ」
「サッカーも野球も、下がれよ！こいつらはテニス部なんだから！」
「黙れ、万年初戦敗退チームがっ！陸上競技も楽しいぞ。どうだ、一緒に走らないか？」
「陸上は去年の奇跡が一回あったぐらいで天狗にならないでほしいな。２人とも、弓道とかどう？」
「んな地味なのは下がっとけ。ウチの高校の自慢なのはボート

だ、ボート」
「競技者人口少ないからインハイ出てるようなもんだろっ。ボクシングやろうぜー」
「この間、一発ＫＯされて鼻がひん曲がったのは誰だっけかな？剣道楽しいぞー」
レスリング部や相撲部といった、比較的図体がでかい面々は輪の外で待機していた。
そうして、無常にもチャイムは鳴った。

次の日、お昼

「いやぁ、蒼崎君。お腹が減ったねぇ」
「そうだねぇ、天月君。昨日、お昼ご飯を食べた記憶が無いのはなぜかなぁ？」
「気づけば美鈴はいなくなってたしなぁ。いやぁ、困ったもんだねー」
「し、しつこいわねっ。悪かったって言ってるでしょ！？」
「ごめんね、空」

質問責めもとい、勧誘責めにあっていたおかげでご飯にありつくことができなかった。
放課後にも捕まったので八方ふさがりだった。

というわけで学食への道のりを歩いていた。

「あれ、天月と蒼崎じゃないか」

廊下で後ろから急に声をかけられた。

知り合いが少ない以上、そういう声には敏感に反応してしまう。

「緋山と……青山か」

「なんだ、緋山夫妻じゃないか」

「うるさいわねっ、天月。美鈴もこんなの相手にしてるの疲れるでしょ？」

「解ってること言わないで。余計に自覚しちゃうじゃない」

「あ、そかー」

青山は見事に無視。

美鈴も青山と一緒にため息をついている。

「ってか、美鈴と青山は知り合いだったのか」

「海の知り合いだったの？ちなみに、雪美も入れてよく3人で遊びに行くわよ」

「海ちゃん達もこれからお昼ー？」

「そーだよ。雪美ちゃん達も一緒に食べよ」

意外に意外だった。

まさか、この3人に繋がりがあったとは思いもしなかった。

ということは雪美も美鈴も緋山とも知り合っていたことになる。

「いやぁ、雪美さんの幼馴染が蒼崎で、藤原の従兄弟が天月とは思ってもなくてな」

「え、天月と美鈴って従兄弟なの？」

「ああ、別に言う必要も無いと思って言わなかったがな」
世の中って意外に狭いのかもしれない。
そんなことを言っているうちに学食に着いた。
…混みすぎ。
前の学校でも席の取り合いは戦争だった気がしないでもないが…
つーか、この混んでる中で席を陣取っている集団がいる。
ちょっと本気で殴りにと行こうかと考えてるうちに席が見つかった。
「ここにしましょう。あたしメニュー買ってきてあげるから」
「俺も行こう」
「塩ラーメン頼むッス」
「わたしも～」
「俺はいつもので」
「太陽と同じー」
なんだ、いつものって。
妙に常連っぽい緋山がちょっとかっこよかった。
いずれはオレも言ってみたいものだ。
「はい、清水。塩ラーメン」
「ありがと、天月君」
「緋山君、いつもの持ってきたわよ。海もお先にどうぞ」
「お、ありがとな」
「ありがとー」
そう言って再び、天月と美鈴は人ごみの中へ消えた。
その直後、それぞれの食べ物を持って帰ってきた。

「なんだ、緋山のいつものってカレーかよ」
「そんな言い方すると後悔するぞ。うちの学食のカレーは絶品だからな」
「まったく、素人よね、蒼崎は」
素人も何も、今日が初だと言うのに、青山は何か勘違いしているのかもしれない。
まぁ、このバカは放っておこう。
「全部口に出てるわよぅ！」
「あー、うっさい。天月、オレのは？」
「ああ」
くいっと親指で人ごみの中を指した。
嫌な予感と共に怒りが込み上げてきた。
「……覚えてやがれ」
ゆっくりと席を立って人ごみを目指した。
途中で学食のおばちゃんが叫えていたので急いだ。
「はいよ、塩ラーメンね。混んでるんだから早く取りに来なよー」
「すんませーん」
人だかりを割りこんで入った時、誰かに後ろから押された。
危なく、塩ラーメンをブチまかしそうになった。
お盆を持ってなかったのが幸いだった。
「危なっ……」

「あ、ごめんなさい」
「いえい……っ…？」

ぶつかった人が謝ってきた。
振りかえって見ると、一人の女子生徒がいた。
背は女子では高い方だろう。
その目を見て、何か他の生徒との違和感を感じた。

「あの……何か顔についてます？」
「あ、いえ…こちらこそすんません」

リボンの色からして同じ学年だろう。
そうして、その女子生徒は人ごみにまぎれて消えた。
その違和感の正体を掴めないまま、席へと戻った。

「いやぁ、学食美味いな」
「だろう？天月も昨日は何食べたんだ？弁当持参？」

「そ、そんな話どうでもいいじゃない。じゅ、授業始まるわよ」
妙に動揺した美鈴が天月と緋山の会話を遮った。
きっと、もう触れられたくないに違いない。
「あ、美鈴じゃない。ちょうどよかった」
一人前を進む美鈴が誰かに捕まった。
それは学食で見たあの女子生徒だった。
「あら、澪奈。どうしたの？」
「そっちのクラスの次の授業、実験室でやるそうよ。それを伝えようと思って」
「そう。ありがとね」
「それじゃあ」
そう言って横を通り過ぎようとしていた。
目が合ったので一応、挨拶ぐらいはしておく。
「…さっきはどうも」
「ああ、別に構わないわよ。それじゃあね、蒼崎君」
不適な笑みを残してどこかへと歩いていった。
その後姿を違和感と共に見つめていた。
「すごいな、蒼崎。もう声かけたのか？」
「人をナンパ野郎みたいな言い方すんな。学食でちょっと話しただけだ」
「そういうのを声かけたっていうのよ、蒼崎君」
「空……ホントなの？」

誤解どころか、雪美なんて本当に信じかけている。
天月と美鈴のコンビはこれから注意しなければ…

放課後

「よし…帰るか」

早速、席を立つ。
勧誘の嵐はさっさと回避するのが懸命だ。
音速で帰る支度をした。

「空、帰るの？」
「ああ。雪美は？」
「わたし、部活なの」
「あー、この間聞いたな。がんばれよ」
「うん、ありがと。それじゃあね」

ついでに天月と美鈴にも挨拶して教室を出た。
その時、ケータイが鳴った。
ディスプレイにある名前を見て、すぐに出た。

「はい、お久しぶりです。一条さん」
『ああ、久しぶりだな蒼崎……急で悪いんだが、闘鬼が出現した』
「……そうですか。場所は？」
『すまない。場所は……』

場所を聞いてすぐに走り出した。
不慣れなこの街で現場に急行するのは骨が折れるが、そんなことを

言ってる暇がない。
一条さんの言っていた場所と、サイレンの音で判断して、現場へと急いだ。

闘鬼とは人外の姿をした化け物のことである。
その姿は人というより獣に近く、何より特徴的なのが2本の角である。
属性者として、2年ほど前から闘鬼と対峙している。
現状をなんとかする為、警視庁からも協力してもらっている。
電話をくれた一条さんは闘鬼の被害の対策本部に配属されている人である。
正直、2・3ヶ月ぶりだったのでもう、闘鬼は出ないと思っていた。

「見つけたぞ……ここにいたか」

とある、路地裏。
郊外の空き地のような場所に闘鬼はいた。
荒い息をしながら声に反応してこちらを向いた。

そこに1台のパトカーが来た。
一条さんが運転席の窓から身を乗り出してこちらに叫んだ。

「蒼崎！俺は周辺の住民の非難誘導をしてくる！！後は頼むぞ！！」
「はい！わかりました！！」

そうして、アルマに手をかざした。

「…頼むぞ、アルマ」
「クゥ！！」
アルマが光に包まれると同時に剣の形に変わった。
その柄を掴んで構えた。
「――――――――――――いくぞ」
『空』の属性者の武具、『蒼天の剣』を構えて地面を蹴った。
一瞬で闘鬼の懐に入り込んで左斜め下から斬り上げた。
ざしゅ
速さに反応できなかったのか、闘鬼の胸の辺りを斬った。
鮮血が散った。
「グオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ！！！」
咆哮をあげる闘鬼。
脚力の全てを使ってこちらへ突進してきた。
この速さと図体の大きさでは避けられそうにも無い。
「『森神の太刀』！！」
その呼び声に呼応するように、『蒼天の剣』が再び光に包まれた。
その光が収まると同時に剣の形が変わっていた。
『蒼天の剣』は全部で１０の武具に変わる能力を持つ。
分厚い刃の幅、身の丈以上もある大きさ。
『森神の太刀』の刀身の腹で敵の突進を受け止めた。

この剣はその刃の大きさと厚さはまさに鋼の塊。
その能力は衝撃を受け止められる、防御の剣。

「っぐ！！」

そのまま、引きずられるように押し出された。
剣で受け止めたまま、地面を蹴った。
再び剣が光りに包まれる。
今度は両手に日本刀ほどの大きさの、『風神の双剣』が握られていた。
闘鬼の顔を蹴って空中へと跳躍した。
上空で反転しながら斬りかけた。
その刃は角に触れた。

「グギャアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！！」

闘鬼の弱点はその特徴的な角にある。
角を2本とも両断すれば闘鬼は消滅するのだ。

頭を抱えたまま、闘鬼は暴れていた。
その隙を見逃すわけにはいかなかった。

「……蒼天流」

膝を曲げ、『風神の双剣』を持った腕を交差させ、両脇に構えた。
そのまま、闘鬼へと間合いを詰めた。

「『滅風』」

ざしゅっ

瞬く間に6連撃を叩きこんだ。
両腕と胴体は『滅風』の斬撃で血に染まっていた。
そこで一瞬、角がから空きになった。
闘鬼の側面に回り込み、『風神の双剣』から『蒼天の剣』に変えて上段に構えた。

「蒼天流……『空束刃』！！」

大気中にある『空』の力を収束し、大きな刃を刀身の周りに形成させた。
あとはそれを振り下ろすだけ。

ザンッ

「グ……オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ！！！！！」

『空束刃』が闘鬼の角を2本とも両断した。

闘鬼は光の粒子となって消えていった。

「蒼崎！無事か！！」

ちょうど、その直後に周辺住民の先導をしていた一条さんが現場へと戻ってきた。

「はい、大丈夫です」

光の粒子の最後の一粒が消えたのを見て、一条さんのところへと走った。

久しぶりだったおかげか、少し疲れた気がした。

だが、この時に大きなミスを残していたのだ。

この現場にもう一つの視線があったことを、この時は知る由も無かった

第０３話：流水

闘鬼を倒し、家路へとつく前に話し合いがあった。
約３ヶ月ぶりに活動を再開した闘鬼に関する話し合いが一条さんや対策本部の人達も交えて行われた。
再び、厳戒体勢がしかれることとなった。

そして、家に着くのは7時半ころになってしまった。

「……た、ただいま」

やはり言い慣れないこの言葉を言いながら居間へと向かった。
きっと、もうご飯を食べているに違いない。

「おかえり、空」
「おかえりなさい、空さん」

なんとまだ食べていなかった。
むしろ、待たせてしまっているようだった。

「すみません…遅くなって」
「構いませんけど、遅くなるなら連絡してくださいね。雪美に一言言うだけでもいいですから」
「そうだよ。それにさっきニュースで闘鬼が出たって言ってたし…心配したんだよ」

まさか、その闘鬼を倒してきた為に遅くなったとは言えなかった。
この家で居候を続ける以上、話さなければならないだろう。

だが、それまでに闘鬼との戦いが終わってほしいというのが本音だった。
そうすれば、言う必要も無くなるだろうから。

「これからは気をつけます…すみませんでした」
「わかってくれればいいんですよ。ご飯にしますから着替えてきてください」

千秋さんは柔らかい、優しい笑顔で許してくれた。
きっと、千秋さんにも心配をかけてしまったに違いない。
おとなしく、着替えてくることにした。

「……日本刀はマシンガンには勝てなかったか…」

ご飯を美味しくいただいた後、千秋さんが煎れてくれたコーヒーを飲みながら無駄知識番組を観てくつろいでいた。
風呂も入り、後は寝るだけ。
やはり、千秋さんは料理も美味しいせいかコーヒーも格別だった。
隣の雪美を見てみると大変なことになっていた。

目はあまり開いていない。
それどころか2秒ほど閉じて、急に開いて、瞼が下がってきて…を繰り返している。
見ている方がいたたまれなくなってくる。

「おい…雪美。そろそろ寝たらどうだ」
「……わたし、寝てないもん。ちくわはマシンガンに勝てたもん」
「お前見てなかったな……とにかく、さっきからずっと眠そうにしてるじゃないか」
「そんなこと…無いもん……空と一緒にテレビ観るもん……」

マシンガンに勝てるちくわなんて正直ぞっとする。
そんなことを言いつつも雪美は眠りそうになっていた。
本人が大丈夫と言うのなら、放っておいてもいいのだろうか。

「すー……すー……」

ＣＭに入ったとたん、ＫＯした。
これはある意味すごいかもしれない。

「まったく、しょうがないんだから…空さん、雪美のこと運んでくれませんか？」
「それぐらいなら大丈夫ですよ。早速、運びますんで」

これは、背負って雪美の部屋まで行くしかないと思った。
雪美は身長的に千秋さんより低いものの、あまり差が無いので運ぶのも大変だと思った。

「ほら、雪美。オレの背中に乗れ」
「……うにゃぁ……わたし…ちくわじゃないもん…」

ちくわの国の夢でも見ているんだろうか。
とりあえず、今は運んでしまおう。
それに……ちょうどいいから。

「千秋さん、ちょっといいですか？」
「はい？どうしたんですか？」

なんとか雪美を背負ってリビングを出ていく前に千秋さんに声をかけた。
いずれは話さなければいけないことだ。

「ちょっと、お話があるので…雪美置いてきた後に時間貰ってもいいですか？」
「ええ、もちろん構いませんよ」

階段を上って雪美の部屋のドアノブをなんとか開けた。

思ったより、雪美は軽かった。
本人の前で言ったらご飯が明日から無くなりかねないが。

「…ほらっ。もう寝ろよ。また明日な、雪美」

ベッドの上に雪美を転がして、上から布団をかけてやった。
むにゃむにゃと言いながら布団に潜っていった。

「……おやしゅみ……空」
「ああ、おやすみ」

あの眠気の中で挨拶できたのはすごいことだと思った。
その安らかな寝顔を見ると、雪美には尚更言いにくくなった。

「……つまり、空さんは属性者で闘鬼と戦ってきたってことで

すよね？」
「はい……今日遅くなったのだって現れた闘鬼を倒してきたからです」
「そう…ですか。属性者の話は聞いたことあったんですが…たしか、お父さんもそうなんですよね？」
「……はい。ですが、その力を引き継いだわけではありません」
「いろいろあるらしいですね…空さんは一体何の属性なんですか…？」

心臓を掴まれるかのような問い。
何よりも恐れていたことだった。
ただ一言。
これから自分が発する一言だけですべてが崩れてしまいそうだから。

「……『空』…です」

これでこの家を出ていくことになっても仕方ないと思った。
この世界の中で、その存在は何よりも忌むべきものだから。

「……そうだったんですか」

千秋さんの表情が曇る。
その名前だけで拒否されてもしかたない。

「こんなこと言うのも何ですけど……今まで、大変だったでしょう？」
「え……？」

千秋さんの一言が一番意外だった。
俯いていた顔を上げてみると、優しく微笑んだ千秋さんの顔があっ

た。

「空さんがよければいつまでもここにいてください。もちろん、属性者だからって差別もしません

少なくとも、わたしにとって空さんは、春奈の息子ですから」

居場所をくれた。

受け入れてくれたと同時に、居場所まで用意してくれた。

いくら感謝しても足りないほどに、暖かかった。

「……ありがとうございます」

次の日

「ほら、行くぞ。ちくわ」
「なんでちくわっていうのー？わたしはちくわって名前じゃないよー」
「まったく、昨日部屋まで運んでやったのは誰だと思ってんだ」
「え、空が運んでくれたの？」
「そうだ。むちゃくちゃ重かった」
「もー、女の子にそんなこと言っちゃダメなんだよ？」
「だったら、自分で起きて部屋まで行くんだな」
「ぶー」

心なしか雪美の顔が赤い気がした。
恥ずかしいなら自分で部屋まで行けばいいのに…
無理にでも起こして自分で行かせるべきだったかと反省した。

学校に着き、机の中身をあさっているとその違和感に気づいた。
むしろ、気づきたくないモノであったが。

「……なんじゃこら」

たくさんの招待状の束がそこにあった。
もう少し可愛い字やそれっぽい紙だったならどれだけいいだろうか。

「よう、蒼崎……って、お前早速人気者だな」
「放課後、体育館裏に来てくださいって……男が使うな、ちくせう」

国会に提出してみようかと思った。
男子同士の呼び出しで体育館裏は無し、と。
お願いだからその法案を可決してくれ。

「めんどくせー。どうやって片付けようかな…」
「先輩からのご指名もあるみたいだぞ？実際来るのは下っ端のやつらだろうが」

きっとこのピアスが大いに関係しているんだろう。
出る杭は打たれる、という言葉を作った人を尊敬した。

「まぁ、こういう対処のやり方はだいぶ慣れたけどなぁ…前の高校でも、最初のうちは……」
「……おい、蒼崎」
「こっちがちょっと本気を見せれば大抵片付くさ。面倒なことには変わりないがな」
「……おい」
「なんだよ、天月。果たし状の束がそんなに欲しいか」
「こんな紙切れ、さっさと焼却処分してくれ。むしろ、紙の無駄だ。っていうか……コレ」

天月が手にしていたのはいかにも女の子らしい可愛い紙と文字だった。

内容は同じように招待状だった。

「……なんですかね、これ。蒼崎さん」

「と、とととにかく、いいい行くしかな、ないんじゃない？」

なぜか、どもってしまった。

いきなりの事態なら誰でも驚くはずだ。

決して、女の子からの呼び出しだからって動揺しているわけではなく。

きっとそうに違いない。

というわけで放課後…

「さ、行くか…」
「待て、蒼崎。どっち先に行くんだ？」
「……オレは、嫌いなモノを先に食べる派だ」
「へいへい。加勢は？」
「いらん。オレだけで十分だ」

天月は呼び出されていない、ということは狙われる対象になっていないということだろう。
だが、これから先に標的にされないとも限らないので、釘をさしておく必要があるのかもしれない。

「……で？話ってなんだ？」
「い、いえ…な、なんでもありませんっ」
胸倉を掴まれたので、その腕を捻って投げた。
その直後、後ろにいたやつが殴りかかってきたのでかわして顔面におもいっきり拳を叩きつけた。
前歯２本に、鼻が折れているだろう。
その一部始終を見ていたほかの連中は急におとなしくなった。
「そうか……誰が言い出したのかわからんが、次はこれだけじゃ済まさないぞ
ついでに言えば、オレの周りを狙ったら命が無いと思え。どこまでも追って、必ず始末してやるからな」
胸倉を掴んでいたやつの胸倉を掴み返して言ってやった。
相当、殺気を出して言ってやったから、効いただろう。
証拠に途中から涙目になっていた。
「さて……場所はここでいいのかな」
例の女の子からの手紙に書いてあった場所へと行った。
学校の裏の方にある空き地。
人通りは少なく、どこか荒涼としていた。

しばらく待っていると人の気配がした。
「急に呼び出して…ごめんね、蒼崎君」
「やっぱり、そうか。あんただったのか」
そこにいたのはこの間、学食でぶつかった彼女だった。
美鈴は澪奈、と呼んでいたようだが。
「こんなとこに呼び出したのは……その、ちょっとみんなの前じゃ言えない話があって」
「……そうか。一つ、質問していいか？」
何よりも気になっていたこと。
そして、あの時感じた違和感。
「他のクラスなのに、どうして転校してきたばかりのオレの名前を知っている
少なくとも、オレはあんたに自己紹介した記憶は無いが」
それを言うと、不適な笑みを浮かべた。
何かたくらんでいるような、そんな笑いだった。
「そんなこと……だって、あんたは有名じゃない？『空』の属性者の蒼崎空」
鼓動が高まった。
どういうわけか『空』の属性者であることが知られている。
ここに来て、剣を使ったのはこの間に闘鬼と戦った時だけ。
まさか、偶然その場に居合わせたというのだろうか。

だが、それにはただ一つの例外があった。
「……そうだな。同じ属性者なら知られていてもおかしくないな」
そう…相手も属性者である場合である。
同じ仲間なら見切ることができるだろう。
『空』以外にも属性は存在する。
自然界のあらゆる現象を司る者……属性者。
たとえば、『風』や『木』、『焔』などがいい例だろう。
陰陽五行説はこれに基づいているとされている。
「あんたの属性は？みたところ、武具は所持していないようだが」
「そういえば、自己紹介がまだだったわね。あたしの名前は水城澪奈。『水』の属性者よ」
そう言うと、どこからともなく長太刀を取り出した。
通常の日本刀よりも遥かに長いその刀身。
その切っ先をこちらに向けた。
「……なんでオレに剣を向ける必要があるんだ」
「興味が無いって言えば嘘になるわね。あの『空』の属性者がここにいるんだから」
切っ先は真っ直ぐこちらを捉えていた。
それには敵対の意志と共に殺気が篭っていた。
「残念だな……せっかく仲良くなれるかって思ってたのによ！

！」

アルマを『蒼天の剣』に変え、間合いに踏み込んだ。
水城の得物は長太刀。
間合いに入りこまれたらそれだけで優位に立てるはずだ。

「……へぇ、速いのね」
「おおおおおおっ！！」

がら空きの右に剣を叩きこんだ。
水城は防御姿勢すらとっていない。

……妙だ。

ざしゅ

斬ったと同時に水城だったものが水になって崩れた。
その直後、背後から水城の声が聞こえた。

「所詮、噂だけだったみたいね。『空』の属性者さん」

振り向こうとして右に反転すると同時に剣を振った。
だが、それよりも速く、水城の刀は右肩を斬っていた。

ザンッ

「ぐっ！！」

1歩下がって間合いをとった。
右手で剣を持ったまま、左手で右肩の傷を押さえた。
『水』の武具は属性者の武具の中で2番目に切れ味がいいという話を聞いたことがる。
血が止まらない。

「水分身……か」
「気づくのが遅すぎたようね。何も疑わずに突っ込んでくるんだもの。笑っちゃうわ」

『水』を操ることができる『水』の属性者が水分身を作れておかしいことは無い。
それすら見落としていたのは落ち度としか言いようが無い。

再び、間合いを詰めた。
剣を『風神の双剣』に変え、最高速度で敵に近づいた。

ばしゃっ

また水分身。
だが、『風神の双剣』の速度なら敵を追うことができる。

「そこかっ！！」

左の後ろの方に気配を感じた。
体を反転させ、左の剣を相手に合わせる。

ギィン！

「さすがに少しは学習するみたいね」

「…そう何度も斬られてたまるか」

その機は逃さない。

合わせた左の剣で相手の刀を弾きながら、右手の剣で敵に斬りこむ。

水城はその一閃を身をかがめてかわした。

捉えようの無いその様は正に、『水』そのものとしか言いようが無かった。

「つまらないから終わらせるわ――――――――――――――――――――『流水の極み』」

次の瞬間、水に囲まれていた。

息ができない上に剣を振ってもすぐに修復される。

「…ここで圧死させてもしかたないからね。せいぜい手足を折るぐらいで勘弁してあげるわ」

だんだんと水の球体の容積が狭くなってきていた。
このままでは圧死というのもあながち上段ではなくなってしまう。
それ以前に、いつまで息を止めていられるかが問題になってくる。

「人の限界は3分。いくら属性者でも、3分もすれば窒息するでしょうね」

相手の言動にまどわされてはいけない。
水の檻は斬ってもすぐに修復されてしまう。
どうすれば…

一つ、閃いた。
むしろ、これで抜け出せなければ終わりになってしまう。

「……っ…！」

剣を『氷神の拳』に変えた。
両腕に手甲を纏い、それを水の檻へと突き出した。

「そんなもので檻が壊れないくらい、まだわからないの？」

これでいい。
前に突き出しながら、この手甲の能力を使う。

ピシッ

徐々に凍り始めた。
突き出すと同時に凍った部分を砕いていった。

「……ぐっ！！」

ピシッ……ビシィ！！

全部凍ってしまえば、水の檻と共に砕けてしまう。
ならばその前に、一つ割れ目をつけることでそこから脱出した。

「ぐっ……はぁ…はぁ…まだ、終わりじゃない」
「くっ！！そんな能力があるなんてね…だけど、今なら！！」

抜け出すだけで精一杯だったせいで体勢が整っていない。
そんな隙だらけの状態じゃ、斬り込まれて終わりになってしまう。
『水神の刀』に変えて同じように水分身を作ろうにも水城ほどの完成度の高い水分身は作れない。
今は反撃する時ではない。

ただ、体勢を整える時間があればいいだけ。
水城の足さばきだけを見て、踏み込む場所を読んだ。
その場所にあったのは水分身を斬った時に飛び散ってできた水溜りがあった。
あとはその場所に合わせるだけ。
いかに水を操る術が水城に劣ろうとも、氷を作る術は水城には引けを取らない。

「きゃっ！！？」

水城が踏み込む瞬間、その場所に氷を張った。
水城はその踏み込みに全体重をかけているために、滑れば確実に体勢を崩す。
その瞬間に立ちあがり、剣を変えた。

「くっ！！」

水城が立ちあがろうとしたとき、すでに剣を水城に構えていた。
一瞬、視線が交差する。

「……終わりだ、水城」
「……なんで、とどめを刺さないのよ。あたしはあんたを傷つけたのに」
「殺すことが目的じゃない。そんな目的のために剣を振るっているんじゃない」

背を向けて歩き出した。
あの時点で確実にとどめを刺せる間はあった。
それがどういうことを意味するか、水城とてわかっていないわけで

はない。

「…そんな甘さじゃ……あの悪魔にだって勝てないわよっ！！」

その言葉を聞いて、何かが反応した。
考えるよりも先に感じ取った。
水城は背後から斬りかかって来た。
ただ、それだけのことだった。

キィン！！

「悪魔が……どうしたって？」

ドスッ

即座に反転し、水城の長太刀を弾いた。
弾いた長太刀は空中で弧を描いて地面に突き刺さった。

「……その殺気…やっぱり、あんたは……」
「言っただろう、水城。オレは殺す気なんて、無いんだ」
「それが甘いって言ってるのよ！じゃあ、今あんたを殺そうとしたあたしも殺す気なんて無いわけ！！？」

蒼崎は一瞬だけ俯いて、水城を見た。
どこか、困ったように笑いながら。

「それでも、殺さない。どうやら殺せないみたいだ。同じ属性の力を持ってるんだから…仲間だろ、オレ達」
「だから、それが甘いのよ！！どうして……」
「そんな顔するなよ。笑えば可愛い顔するんだからさ。この甘さで痛い目に遭うのはオレだけだ。だから、全然構わない」

水城は何も言わず。
蒼崎もそれから何も言わないまま、その場を立ち去った。
その場に存在する、複数の視線に気づかないままで。

第０４話：五鬼

肩口をさすると、水城に斬られた傷はかさぶたになっていた。
水城と戦ってから２日が過ぎた。
属性者の自然治癒能力は常人のそれを遥かに凌駕する。
あの程度の刀傷なら数日で完治する。

「澪奈ちゃんと仲悪いみたいだけど…何かしたの、空？」
「いや、少なくとも嫌われるようなことはしてないと思うんだが…」

変わったことと言えば、戦ってからの水城の態度だった。
あからさまに敵視してきていた。
廊下で会えば睨まれるし、学食で隣に並ぼうものなら最後尾に行きなさい、とか言う始末。

「でも、何かしたならちゃんと謝っとくんだよ？何ならわたしも手伝うよー」
「…そうだな。その時がきたら、頼む」

そんな話をしているうちに余裕をもって学校に着いた。
こちらとしても、毎日マラソンをするつもりは無い。

トイレに行こうとして廊下を歩いていると、見覚えのあるツンツン頭を見つけた。

「あれ、緋山じゃないか」

「おう、蒼崎！朝見なかったから遅刻したのかと思ったぞ」

「オレだって毎日マラソンしてたまるか。それにそんなにギリギリな登校してないぞ」

「転校早々、勇気あるよな。そういえば天月は一緒じゃないのか？」

「ああ、オレ一人だ。トイレに連れ立って行っても仕方ないだろう」

普段、天月と1セットで数えられているような気がしないでもない。転校したばかりなので、天月と行動することが多いのは不思議なことではないと思うが。

それに、昔からの腐れ縁、ということもある。

トイレから戻り、緋山と他愛の無い話をしている時だった。

もともと、危険な事柄には鼻が利く方だと自負していたが、この時

ばかりはそのアンテナは働かなかった。

「なるほどねぇ。蒼崎は前からあのバンド聴いてたよな」

「オレとしては、あのギターの音がいいと思うんだけどな。ベースの重低音もいいけど」

一瞬。

その判断が遅れるだけで大惨事が起こることがあるんだと、このとき思い知った。

「ど、どいてーっ！！」

ペズンッ

ガッ　ガッ　ガッ

ズザー　ドンッ

「おい、蒼崎！！しっかりしろ！！蒼崎！！あおｓ……」

そこで強制的に意識が断絶された。

「……ち、ちくわっ？」

飛び起きると、そこは保健室のベッドの上だった。

びっくりした表情の雪美と、なぜか呆れた顔をしている美鈴と海。
そして、なぜか笑っている天月と緋山。

「……みんな…どうしてここに？雪美も…そんな顔してどうした」

「空が倒れたって聞いたから……急いで来たんだよ」

「ちくわ、じゃないわよ、蒼崎君。あなたね、雪美がどれだけ心配してたのか、わかってるわけ？」

呆れ7割、怒り3割くらいで刺さるようなことを美鈴が言ってくる。
いや、こちらとしても状況説明が欲しい。

「だいたい、第一声がちくわってバカじゃない？まぁ、そんなことは前から知ってたけど……痛っ！！何すんのよっ！！」

とりあえず、青山の頭をひっぱたいておいた。
緋山と天月がくすくす笑っているのが気になった。

「おい、そこの笑ってるバカ2人。状況説明を頼む」

「ははは……だってよ、目の前でこいつがバウンドしたんだぜ。天月も見ればよかったのに」

「人ってバウンドするんだな。くくく……惜しいことをした」

人が状況説明をしろと言ってるのに、この2人は日本語が通じてないらしい。
怒りと同時に視界に入った見知らぬ女子生徒に目が行った。
背が小さく、髪を両脇に結っていた。
というより、その頭にあるアンテナのように伸びた髪に目がいった。
制服のリボンの色からして1年生だろう。

「えーっと…ところで君は？」
「えと…あの…その…」
「この子が蒼崎君と衝突したのよ」

バウンド、衝突、という単語。
なんだかだんだん嫌な予感と共に頭痛がしてきた。

「あの…ごめんなさいっ……わたし、急いでて…先輩とぶつかちゃったみたいで…」

しどろもどろな女子生徒の説明を要点だけまとめると、こうだった。
トイレから出てきたとき、その女子生徒が非常に急いでおり、猛スピードで走っていた。
そして、運悪くその直線上にいたオレと激突。
そして、激突されたオレは地面を3バウンドほどしてから床を滑り、更に廊下の壁に頭からぶつかった。
その後、担架で保健室まで運ばれたそうだ。

「……なんじゃそりゃ」
「い、一応、本当ですっ」

そりゃ、目の前で人が3バウンドもすれば笑いたくもなるだろう。
だけど、今度絶対殴ってやる。
その本人達はさっさと次の授業に行ってしまった。

「あの……本当にごめんなさい」

きっと緋山と天月に対しての報復を誓った顔が酷く怒っているように思ったのだろう。
その女子生徒は本当に申し訳無さそうに俯いていた。

「まぁ、いいって。こうして生きてるわけだしな」
「でも、でもっ、あたしのせいで……」
「だから、怒ってもいないよ。君はケガとかしなかったのか？」
「…何もありませんでした」
「ならよかった。オレは人よりちょっと頑丈だからいいんだよ」
「でも……申し訳無いです」

これは少し困った。
見ず知らずの先輩にそこまで激突してしまったら多少の罪悪感もあると思うが、一瞬の表情を読まれて誤解されているみたいだった。
このやりとりがずっと続きそうな予感がした。

「…そうだな。それじゃ、学食一回奢りでいいだろう」
「……え…？」
「学食で昼飯奢ってくれ。それでチャラだ」
「え…あ、はい！」

そんな時にチャイムが鳴った。
このまま次の授業も寝ていたかったが、目の前の女子生徒はそういうわけにもいかない。

「ほら、授業始まるぞ」
「あの…お名前を教えてくれませんか？」
「あ、それもそうだな。オレは、蒼崎空だ。よろしくな」
「蒼崎先輩…ですか。わたしの名前は…風子です」

まだあまり話していないので深く知ったわけではないが。
その名前はすごくぴったりな気がした。

「うし。またな、風子。約束、忘れんなよ」
「はいっ。それでは、また今度お昼誘いに行きますからっ」

少し顔を赤くしていたような気がしたが、それを確認する前に保健室から出ていってしまった。
結構時間もおしていたのでまた焦って飛び出て行ったんだろう。
次の犠牲者が出ないことを静かに祈った。

「ったく、ケガ人を歩かせるなよ…」

その後、昼前の授業の最中に天月からメールが来た。
どんな労いの言葉かと思えば、「昼、学食」とだけ書いてあった。
さすが、数少ない昔からの友人だと思った。

学食のフロア全体を見渡して、なんとか遠くからやつらの姿を確認することができたが、人ごみがすごくて近寄れない。
こんなところで風子とぶつかった時のような事故が起これば、死者が出ると思った。

「ど、どいてっ！！」

がっしゃーん

仰向けに倒れたようで、視界には学食の天井が見えた。
そして、空中に浮いているどんぶり。
ああ、あれは今日の日替わり丼のカルビ丼だなぁ、とか考えていると違うものが視界に入った。
それは人の背中だと気づいた時には潰されていた。

めちゃ

「ふー、なんとかカルビ丼だけでも死守できたわ…」
「……あの」

鼻を押さえて声をあげた。
どうやらその人の後頭部が直撃したらしく、どくどくと血が流れている。
てか、ちょうど仰向けで倒れているオレの上に乗っかってるのだから、客観的に見ればとんでもないことだと思った。

「わっ、ご、ごめんねっ！！」

死守したカルビ丼を抱えながら、飛び退いた。

もう少し早かったら助かりました。

「だ、大丈夫？」

「まぁ…なんとか。ティッシュくれたら非常にありがたいです」

非常に鼻が痛い。

そりゃ血も出るだろうと思うくらいの激痛だった。

しかもなかなか止まらない。

「ご、ごめんね。はい、ティッシュ」

「助〝がり〟ま〝ず」

そのティッシュを受け取りながら、どこかで見たことのあるアンテナが目に入った。

個人的にはそれどころじゃなかった。

「大丈夫？保健室いった方がいいんじゃない？」

「いや、さっきまでいたので…これ以上行くと保健室の先生に目を付けられてしまいそうなのでやめときます」

「そ、そうなんだ。そうだね…お詫びもかねて、今度学食奢るよ。それで許してくれないかな…？」

「別にかまいませんけど…先輩もケガがなさそうでよかったです」

よく見ると、すごく綺麗な人だった。

リボンの色からして、３年生だろう。

大人っぽいので、可愛いというより綺麗だと思った。

「じゃあ、名前を教えてくれないかな。あたしの名前は村上未来。好きなように呼んで」

「オレの名前は蒼崎空です。よろしくお願いします」
なんとも変な自己紹介をしていると思った。
それも1日に2度も同じようなことがあった。
「蒼崎君ね。じゃあ、今度誘いに行くから。それじゃあね」
「あ、はい。それでは」
そうして人ごみの中に消えていった。
今更ながらにどこかで見たことある気がした。
「空ー？遅いよー」
「ああ、ごめんな。先に食べててくれ」
「どうしたの、鼻血？」
「……悪いことってのは重なって起こるものらしい」
「どうしたの？」
その後、なんとか塩ラーメンを頼んで、天月達に合流した。

放課後

「…恐ろしくハードな1日だった気がする」
「不運の塊のような男だな。見てる分にはおもしろいから別にいいけど」
「お前っ、そんな不運に追われてる身になれ！！」
「悪いが、そんな気は毛頭無い。泣くなら一人で泣けよ、気持ち悪いから」

自分の親友は酷く冷たいのだと確信に近いものを感じた。
疲れた体を引きずって帰ることにした。

「あ、帰りにCD屋寄らなきゃ」
「ん、何か出るんだったか？」
「おう。あのバンドのアルバムをだいぶ楽しみにしてたからな」
「前に言ってたな。今度は商店街で事故らないように気をつけろ」
「うっさいな！！そう何度も事故ってたまるかっ」

そうして、天月と別れ、商店街へ向かった。

「さて…あとは家に帰って楽しむとしよう」

念願のアルバムを買って、帰路についた。
しばらくはこれで満足できそうだった。

ふと、視界に見覚えのあるアンテナ…顔が入った。
同時に、向こうも気づいたようだった。

「あ、蒼崎先輩。どうもです」
「おう、風子に…未来さん？」

「あら、風子とも知り合いなの？手が早いわね、蒼崎君」
どういうわけか、この２人が並んで歩いていた。
そして、それを見てようやく気づいた。
「もしかして…姉妹、ですか？」
「あれ、てっきり風子とも知り合ってたから、わかってたと思ったけど」
「そうですよー。結構、人にも似てるって言われますし」
「む…たしかに、似てるな」
特に揺れるアンテナとかは瓜二つだった。
これは気づかない方がおかしい。
そして、少しの間、他愛の無い話をして買えることにした。
今日、事故があったといえど、この姉妹とだいぶ打ち解けることができた。
「それじゃあ、今日はこのへんで。奢り、楽しみにしてますからね」
「う、覚えてたかー…それじゃあ、明後日にでもしよっか？」
「いいですね。わたしもそうしようと思ってました」
「それじゃあ、明後日ですね」
そうして、軽く挨拶をして歩き出した。
風子のその一言を聞くまでは何気ない別れだった。

「でも、本当にいたんですね。『空』の属性者って」

振り向いた瞬間、すでにそこに未来さんと風子の姿は無かった
そして、街から何かが割れるような音が轟いた。
この反応は……闘鬼か。
しばらくしてから、ケータイに電話が入った。

『蒼崎、闘鬼が出た！！場所は折原商店街だ！！今どこにいる！？』
「ちょうどよかったです。オレも今そこにいます！！」
『そうか…悪いが到着まで時間かかりそうだ！！すぐ近くにいる警官に周辺の人を避難を命じてある』
「わかりました！」

電話を切って、その音のした方へと走り出した。
しばらく行った路地裏にそいつはいた。

「グウウウ……グオオオオオオオオオオオオオッ！！！！」
「くっ！アルマ、剣を頼む」
「クゥ！」

『蒼天の剣』を握り締め、目の前にいる闘鬼へと距離を詰めた。
最近では闘鬼も特殊な能力をもつ種類も出てきた。
突き刺した爪から毒を出したり、音で攻撃をしてきたり。
まず始めに一撃を撃ち合わないと判断がつかない。
ガギィ！！
何事もないかのように刃を受け止められた。

どうやら目立った能力は無いが、少々体が頑丈らしい。

「なら……『地神の剣』」

『森神の太刀』に次いで、二番目に分厚い刃を持つこの剣。
剣自体の重さは一番重い。
その剣の重さでどんな頑丈な装甲も砕ける。

ガキッ

「ギャアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！！」

血飛沫と共に咆哮をあげた。
受け止めた腕を切り落としたんだからそれぐらい叫んでも仕方ないだろう。
相手がひるんでいる隙に、角を斬り落としに地面を蹴った。

「―――――――――蒼天流」

『蒼天の剣』に空気中にある『空』の力を収束させる。
もとの刃の何倍もの大きさの刃を形成し、そのまま振り下ろした。

ザンッ

角と共に頭部もそれで跡形も無くなった。
光の粒子に消えて無くなる、はずだった。

キィィン

「っ！？　なんだ！？」

光に変わった瞬間にすぐ消えた。
いつもなら少しずつ無くなっていくのだが、いつもと違った反応に再び構えた。

「いやいや、なんとも素晴らしい腕前。感服致した」
「はっ、よく言うぜ。あれだけ手際の悪いのにな」
「そうかしら？少しずつ痛めつけながら殺せるからいいんじゃないの？」
「……斬ってみたい。ソレ以外には興味など無い」
「……」

そこには妙な5人組がいた。
やたら筋肉質なのが一人。
見た目がチャラチャラしていて同い年ぐらいな男が一人。
お姉さん系の女が一人。
時代錯誤な和服を着た男が一人。
そして、布に包まった塊になっているのが一人（？）。
避難もしないでこちらを見ていた。

「あんたら…避難しないで何やってんだ？」
「ったく…とんだ期待外れだ。予想以下の反応しやがって」
軽そうな男がつまらなそうに唾を吐き捨てながら言った。
どうやら闘鬼との戦闘の一部始終を見ていたらしい。
「なんで我らがここにいるか見当もつかんか、『空』の属性者」
「もっと簡単にしてあげなさいよ。エンも怒ってるみたいよ？」
「……！……！！」
まったく状況が理解できない。
目の前の5人組が何なのかも。
なぜ、属性者だとわかるのかも。
「へぇ…可愛い顔してるのね、ぼうや」
「っ！！？」
気づけば女がオレの頬に手を添えて、目の前にいた。
直後、飛び退いて剣を構えた。
「貴様ら、一体…」
「可愛いからヒントあげちゃうわ。……ほら」
ズシッ
一瞬、強烈な殺気を感じた。

それも5人分。
それは間違い無く、目の前の5人から発せられていた。
そして、その殺気は感じたことのある、ある殺気に似ていた。

「貴様ら……闘鬼、なのか…！？」
「ご名答。悪ぃけど、こうでもしないとわかんねぇなんてマジ終わってるぜ、てめぇ」

目の前にいる5人組は闘鬼だと言った。
だが、その姿は形は人間のそれと何の遜色も無かった。

「人間の姿を持つ闘鬼、だと…？」
「そうだ、『空』の属性者。我らこそが、闘鬼の上に君臨する闘鬼。『五鬼衆』だ」

闘鬼の上に君臨する闘鬼。
ならば、今まで戦ってきた闘鬼は下っ端でしかないと言うのか。

「ふむ……洞察力はそれなりにあるようだ。今までの闘鬼はわたし達の足元にも及ばぬ」
「まぁ、変な能力持たせたりしたけど？どれも弱くてしかたなかったのよ」
「能力を、持たせた……？」

能力を与えることもできるというのか。
ならば、その実力は闘鬼の中でも極めて上位にあるに違いない。

「…貴様ら目的は何だ。白状しないようなら、斬る」
「まぁ、物騒ね。焦らなくても教えてあげるわ。あんたが知っといた方がおもしろそうだしね」

「たしかにな。ぶっちゃけて言うと、俺ら相当暇してるわけ。下級の闘鬼に任せるのもかったるいから俺らでゲームでもしようと思ってな」
「ルールは簡単だ。どれだけ多く殺せるか、その数で競うのだ」
「そして、その勝負に勝った者は…あの方への挑戦権を手にできる、という寸法だ」

誰に挑戦できるかなんてどうでもいい。
そんな情報、知らなくたって構わない。
ただ一つだけ、許せないことがあった。

「…貴様らの暇潰しに人を殺す、だと…そんなこと、オレが！！」
「阻止する、か？できるものならやってみろよ、『空』の属性者。あんたが混ざればゲームは最高に白熱するからよ」

それすら楽しみの一つ。
目の前にいるのが、人ではないただの闘鬼だということを思い知らされた。

「……上等だ。そんなこと言ってるなら、今すぐ相手してやる」

『風神の双剣』に変えて、最大速度で間合いを詰めた。
一番近かった軽そうな男に斬りかかった。

ガギッ

「焦るなよ？てめぇは必ず、血祭りにしてやっから」

「ぐっ……！！」

真横に凪いだ右の刀は指で止められ。

同時に繰り出した左の刀での突きは、指で挟まれて軌道を変えられた。

「ま、せいぜいそれまでに殺されんなよ。『空』さんよ」

そう言って全員同時に姿を消した。

その一撃のやり取りだけで、実力の差を見せ付けられた。

あの5人の実力は通常の闘鬼と比べることすらできない。

自分の剣が、小さく見えた

第０５話：風雷

「邪魔、なんだよ！！」

ざしゅっ

『水神の刀』で角を両断した。
一瞬光ったと思えば、すぐに消えていく。
その様は、あの５人組に会った時のように。

「くっ…これで５体目か」

登校してすぐに一条さんから電話が入った。
同時に闘鬼が出現したらしく、前代未聞の事態に対策本部は混乱していた。
すぐさま次の現場へ急行した。

目の前には闘鬼が3体。
1体はすでに角を両断した。
1体は片方の角を切り落とした。
1体は両腕を斬った。

「はぁ…はぁ…おおおおおおおおおっ！！！」

とどめを刺すべく間合いを詰めた。
それぞれ一撃で仕留めることは容易い。

「グアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！」

急に咆哮をあげたので一瞬、動きが鈍った。
止まって様子を見ながら剣を構えた。

「な……に……？」

片方しか角の無い闘鬼が両腕の無い闘鬼を食いだした。
すると、片角の闘鬼に変化が起きた。

「角が…3本？」

それを視認した直後、その闘鬼が凄まじい速度で間合いを詰めてきた。
呆気にとられ、目で追うだけで精一杯だった。

「グ…ガアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！」

ガキィ！！

剣の腹で受け止めても、受け止めきれずに吹っ飛ばされた。
「ぐっ！！あれは…なんなんだ…？」
速力も腕力も通常の闘鬼の比ではなかった。
体勢を立て直す暇すらない。
再び、こちらへと突進してきた。

ドゴォッ！！

後ろにあったブロック塀は容易く粉砕されていた。
こんな当身を食らえばひとたまりも無い。
地面を蹴って、体勢が整っていない闘鬼に斬りかかった。
それはまったくの死角。
ブロック塀の残骸に隠れて見えない方から斬りかかった。

だが、気づけば眼前に闘鬼の腕が迫っていた。

ガギッ！

剣の腹で受け止めることはできたが、衝撃で壁まで吹き飛ばされた。
壁に激突した右肩が痛む。
「っぐ…」
その速度、腕力は桁外れだった。
これほどまでに強化されるとは思いもよらなかった。

次の一手を摸索してる最中、突如異変が起こった。

「ガッ…グウウウウウ…ガアアアアアアアアア！！！」

突然、闘鬼が頭を抱えながら苦しみ始めた。
頭を振り乱し、何度も地面に頭を叩きつけていた。

勝機は、正に今。
どういう経緯で異変が起こったのかは見当もつかないが、これを逃してしまえば勝ち目は薄い。
『氷神の拳』を地面に叩きつけ、闘鬼の足元を凍らせた。
さらに、機動力が殺された闘鬼の両腕を『風神の双剣』で上空へと疾走しながら両断した。

「これで、終わりだ」

空中で『蒼天の剣』を構えた。
形成された巨大な刃をその角めがけ振り下ろした。

右肩が痛む。
先程の闘鬼との戦闘で壁に叩きつけられたせいだろう。
授業の真っ最中に行くと目立つので屋上で授業が終わるのを待つことにした。

「……はぁ」

闘鬼は格段に強化されている。
今日戦った闘鬼を取り込むタイプの闘鬼だってこれから何度出てくるかわからない。
もしも、あの場で異変が起きなかったらもっと苦戦を強いられただろう。
それに、例の5人組だっている。
現状でてこずっているのに、相手になるのだろうか。
その戦闘能力がわからない以上、楽観も悲観もできない。

「あれぇー、サボりですかぁ？」

姿は見えない。
少し幼さの残った声が聞こえてきた。
一度聞けば簡単には忘れないだろう。

「そういう風子だって、サボりか。オレはちょっと用事があったんだ」
「わかりやすい言い訳だね。蒼崎君は嘘が下手ね」

もう一つ聞こえてきた異なる声。
まさかその声の主までここにいるとは思わなかった。

「って、未来さんまで何やってんスか。受験生でしょうに」
「ちゃんと勉強してますから大丈夫ですよー。蒼崎君だって授業に置いてかれるよ？」
「能ある鷹は爪を隠すってやつですよ。やるときはやりますから」
「…自分で言う人っているんですね」
「やかましい、風子。冷たく言うな」

会って少ししか経っていないけれど、この姉妹と話していると退屈しない。
だけど、脳裏によぎるのは以前の風子の一言だけだった。

「…で？『空』の属性者のオレになんの用なんですか、２人とも」

だからこそ、確かめたかった。
属性者とはまったく無関係そうなこの2人から、なぜそんな言葉がでてきたのかがわからなくて。
その先に見え隠れする可能性を否定したくて。

「そんなの決まってるじゃないですか。だからここに来たんですよ？」
「蒼崎君の『空』の力が欲しいだけ、だよ」
「あなた方がこの力を手に入れたって何の意味も無いはずだ。それに…属性者でなければ」
「ここまで言ってもまだわからないんですか？同じ属性者あれば、すぐにわかりますよ」

風子のその一言で、可能性は一瞬にして崩れ去った。
最初から、可能性ですらなかったのかもしれない。
それはただの自分の願いだったということに今更ながらに気づかされた。

「そう…か。それで、いつに？」
「そうだね、手っ取り早く済ませちゃおうよ」
「今日の放課後でどうですか？もとからわたし達はそうしようとしてたんですけど」

逃げなんて選択肢は用意されていなかった。
もとからそんなものにすがるつもりでいたわけでは無い。
ただ、ここまで慣れ親しんだ人達と刃を交えるのは抵抗があった。

「……わかりました。場所はどこですか？」
「場所なら、この間に蒼崎君が澪奈と戦ったところがいいんじゃない？」

あの日の戦いも見られていたというのか。
属性者との初めての戦いということで余裕が無かったのだろう。
それがこんな失態に結びついている。

放課後

「空はこれからどうするの？」
「あー、商店街にでも寄ってく。お前は部活だろ？」
「うん。試合近いからがんばってるんだよ」
「そんな時期か。がんばるのはいいけど、ケガしないように気をつけろよ」
「ありがと。それじゃあね」

手を振って雪美を送り出した。
これからのことを考えると鬱になるが、雪美に感づかれたら余計な心配をかけてしまう。
待ちうけている戦いのことなんて話せない。

「浮かない顔してるな、蒼崎。清水が行ってしまって寂しいのか？」
「あのなぁ…オレの顔が寂しそうに見えるお前は、眼科行って眼球取り替えてきてもらえ」

後ろから天月がやってきた。
どうやら美鈴も部活のようで姿は無かった。
ちなみに、雪美と美鈴は同じ部活らしい。

「両目とも視力には自身があるんでね。取り替えたくも無い」
「へいへい。で、天月は帰らないのか？」
「ああ、ちょっと用事があってな。お前は暇そうだな」
「そうでも無いんだよなぁ…またお呼びだしだ」
「また？今度は何人？」

この前のように人数だけでかかってこられたらどれだけ楽だろうか。
今度の相手は数よりも厄介な代物を手にしていることだろう。

「美人の姉妹」
「……本当に手が早いな、蒼崎」
「…激しい誤解を生んでいるようだな。この間の衝突事故の時の2人だ」
「ああ。お前とぶつかったはずみでキスしたあの後輩と学食でお前の上に乗ってたあの先輩」
「激しく間違った説明ありがとう、天月君。あの2人……属

性者だ」
おちゃらけた雰囲気から、一瞬で空気が凍った。
これで2度目の属性者との戦い。
これが意味しているものを天月はすでに悟っているだろう。
「…つまり、この学校にいる属性者には俺達のことがバレてるってことか」
「そうみたいだ。面倒なことにならなきゃいいが…」
「実際、蒼崎は面倒なことになってるようだけどな」
「お前はさ……」
屋上での別れ際。
未来さんが言った一言が気になっていた。
「オレの力を欲しいと思ったことがあるか？」
「俺が『空』の力を？悪いが見てても、到底使いこなせそうにないと思う」
「そっか…」
「『空』の力が目的なのか？」
「そうみたいだ。だけど、この力はオレしか使えないはずなのに…」
「『蒼天の剣』も他の属性の武具を使えるんだ。他の属性が『空』を取り込めるんじゃないのか？」
『蒼天の剣』は各属性の武具を使うことができるため、各属性者の力を取り込むことができる。
取り込むことでその武具の力が強化されるらしい。
この間だって、水城から『水』の力を取り込んだ。

「…こんな力、どうして欲しがるんだろうな」

先日、水城に案内された場所に行くと、すでに2人の姿があった。
拳を握り締め、近づいて行った。

「ちょっと遅刻かな。女の子を待たせちゃダメだよ、蒼崎君」
「……一応、5分前なんですけど」
「お姉ちゃん、わたし達が早く来すぎただけだよっ」
「黙ってれば、ただで『空』の力をくれたかもしれないのに…おしゃべりね」
「あ、そっか。失敗したねー」
「とにかく、さ。蒼崎君も武具を出しなよ」

そう言うと未来さんの手には巨大な矛が。
風子の手には日本刀が2本握られていた。

「そういえば、蒼崎君にはまだ何の属性か話して無かったね」
「わたしは『風』、お姉ちゃんは『雷』です。早く始めましょう、『空』の属性者の蒼崎先輩」

ここまで来て戦わないという選択は選ばせてくれそうになかった。
アルマを『蒼天の剣』に変えて、構えた。

「それが、『空』の属性者の武具の『蒼天の剣』ね。空みたいな綺麗な色ね」
「お姉ちゃん、見惚れてる場合じゃないでしょ！」
「そうね、それじゃあ…いくよ！」

未来さんが矛を振りかぶって真っ直ぐこちらへと間合いを詰めてきた。

横一文字に矛を凪いだ。

ガキィ！！

「ぐっ！！」

右側からの斬撃を受けた。
剣で受け止めることはできたが、その武具の巨大さからか予想以上に重い一撃だった。
受け止めれば動きが止められてしまうので、そのまま右方向へと跳んだ。

「捕まえましたよ、蒼崎先輩」

先程の一撃で視界は未来さんだけを捉えていた。
だからこそ、風子の姿がいなくなったことにまったく気づいていなかった。
着地まではあと一瞬必要だった。

「終わりです！」

その両手にある2本の刀で斬りつけてきた。
『蒼天の剣』は未来さんの矛を受け止めたままで動かせない。
急いで『風神の双剣』に変えて、その一撃を受けとめた。

ガギッ！！

風子は2本。
それをこちらは1本で受け止めている。
力の差はあるにしろ、その単純な数の大きさで受け止めきることが

できなかった。

ギギィン！

未来さんの矛はなんとか捌けたが、風子の一撃で後方へと弾き飛ばされた。
なんとか、着地して2人の姿を探した。
今までの場所には影すらなかった。

「残念ね」
「はずれでーす」

左右から2人の声がした。
風子は左側から、未来さんは右側から武具を構えて空中にいた。

ガキッ！！

一瞬前までいた地面に3つの刃が叩きつけられていた。
なんとか瞬時に後ろに飛び退いてかわすことができた。

「わたし達がはずれですぅ」
「おっしー！でも、いつまでかわし続けられるかな？」

すると、今度は風子が間合いを詰めてきた。

同時に右の刀を繰り出してきた。
それを左の刀で受け止め、右の刀で斬り返した。

「残念でした♪」

風子は1歩後ろへ跳んで一閃を交わした。
それと同時に右へと避けた。
突然の行動で面食らった。
追おうとしたが、未来さんの姿が見えないことから足を止めた。
すると、まっすぐ先に未来さんの姿があった。

「これで、終わり」

矛の柄の方を掴んで体ごと一回、回った。
そして、その遠心力を消さないように真上から振り下ろした。
その武具の重さ、巨大さに遠心力が加算された一撃。
それは今までのどの一撃よりも大きいはず。

ズドォオオオン！！

左方向へと跳んでその一閃をなんとか避けた。
その一閃とともに、振り下ろされた場所に雷が落ちたような音がし

た。
きっと、落ちたような、ではない。
あの一撃は雷を落とす付加効果があるのだろう。
ほうけていると、右側から気配を感じた。
だが、もう遅かった。

ざしゅっ

風子の斬撃が右肩をかすった。
身を捩って深手になることだけは避けることができた。
右腕を動かせば痛みが走る。
長期戦になれば厄介なことこの上ない。
それ以上に厄介なのはあの2人の異常なまでの移動速度だった。
『雷』と『風』。
両方とも速いことの例えになるように、その速さは属性者の中でも郡を抜くのだろう。

傷を厭わず剣を振った
それを未来さんは矛で受け止めた。
力では負けないはず。

しかし、その考えはあまりにも浅かった。

「甘いね。敵はあたし一人じゃないでしょ」
「っ！！しまっ…」

次の瞬間、吹きすさぶ風に体の自由を奪われていた。

「くっ…！」

風子の双剣の斬撃が襲ってきた。
右凪ぎと振り下ろしが同時に襲い掛かった。

ザシュッ！

ズバッ！！

胸を少し斬られた。
斬撃自体はそんなに深くは無い。

「ぐっ！！」

竜巻にそのまま上空まで上げられた。
上で未来さんが矛を構えている姿が視界に入った。
このままじゃ、確実に殺さ――――――――――――――

ドクン

「ったく。この、下手くそが」

次の瞬間、竜巻は消え去っていた。
上空から未来さんは矛を振り下ろした。
体は、動く。
ならば、やるべきことは一つだけ。

「ぐっ……！」
「うー、しぶといですねー」
「……その速さ、今に止めてやるよ」

直後に左側に気配がした。
同時に『森神の太刀』に変えて、左側へと振った。

ギィン！！

「きゃっ！！」

そこにいたのは風子だった。
『森神の太刀』は一番重い剣。
いかに速度があるとはいえ、風子の一撃では決して揺るがない。
すぐに『氷神の拳』に変えて風子の足元を凍りつかせた。

「え……動けない！！」

着地したと同時に足場を固めた。
これでしばらくは風子は動けない。

「女の子の足を冷やすなんて関心しないわね、蒼崎君」
いくら速くとも、少しの間だけは1対1で相手をすることができる。
右上からの一撃を『蒼天の剣』の腹で受け止めた。
そのまま刃を滑らせ、矛の柄を伝って間合いを詰める。

「え……っ！！」

直後に、『焔神・氷神の拳』に変え零距離まで詰めて当身をかました。
未来さんは後方へと弾き飛ばされた。
その場所まで間合いを詰め、『炎神の拳』についた刃を突きつけた。

「…あなたの、あなた達の負けです」
「くっ……やっぱり、強いんだね」

諦めたように手から矛を離した。
戦いが終わった今、風子の足元を凍りつかせている氷をなんとかしてやらなければいけない。

風子がいる場所まで近づいた時だった。
後ろから矛を握る音と共に、地面を蹴る音が聞こえた。
視界の隅には矛を持って振りかぶった未来さんが入った。

この一撃だけは余裕があった。

今なら、よけて一撃を入れることだってできるだろう。
だが、目の前には風子がいた。
避けても、捌いても風子には刃が届いてしまう。
未来さんも、オレの姿と重なって風子との間合いがわからなかったのだろう。
驚いた顔をしていたが手は止まりそうになかった。

今、自分ができる最大の動作は２つ。
そして、右手にある武具は『焔神の拳』。
それだけで、するべき動作が決まった。

右手の手甲で風子の足元の氷を溶かした。
これでまず移動ができるようになった。
あとはもう一つの動作をする時間しか残っていない。
飛び退く暇すらない。
逆に今、飛び退けば風子と一緒に輪切りにされてしまう。
残った手段は一つだけ。

「風子！！」
「え…きゃっ！」

風子の肩を掴んで抱き寄せた。
そうして迫り来る刃を右手だけで受け止めた。

ガギィンッ！！

「……っ！！……ふぅ」

なんとか受け止められた。
右腕は衝撃でしびれている。

「蒼崎君……ごめん…なさい…ごめん…っ！！」

未来さんはその場にうずくまって謝ってきた。
だが、未来さんが最後まで風子との間合いを確認できなければ受け止めきれなかっただろう。
途中で力が抜けたから、片手だけで受け止めれた。

「大丈夫、ですよ。風子も無事ですし、オレも大丈夫ですから」
「ごめん…あたし、卑怯なことしちゃって…」
「構いませんよ。もともと2人を倒す目的じゃないんですし。風子も無事か？」

腕の中にいる風子に話しかけた。
すると、顔を真っ赤にして俯いていた。

「ご、ごめん！！大丈夫か…？」
「はふぅ…」

腕を放すと、ぺたんと座りこんでしまった。
依然、顔は赤いままだった。

「おい、風子！大丈夫かっ！？おい！！」

肩を揺さぶってもふにゃふにゃしたままだった。

「ふにゅぅ……」
「あー、呼吸困難になってたのか…すまん！あの時は必死で…」
「……なんだ、風子にとっては結果オーライなわけね」

それを見て、未来さんはニヤニヤしていた。
風子は相変わらず、真っ赤な顔であさっての方向を見てぼーっとしていた。
戦闘中の不可解な一つの出来事を忘れたままで。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8440a/

蒼い空の下で

2010年10月20日12時52分発行